【岐阜女子大学】メタデータ記述用紙

	メタデータ項目	メタデータ記述欄
1	ID	
2	表題名	沖縄の歴史上人物
3	資料名	吉屋チルー　御茶屋御殿跡
4	内容分類	郷土・歴史
5	索引語	沖縄、歴史、吉屋チルー、琉歌、御茶屋御殿跡、御茶屋御殿石獅子
6	説明	吉屋チルーは 17 世紀頃に存在したといわれている琉歌人。幼いときに遊廓へ売られ、ある男性と恋仲になるが裂かれ 18 歳で自死したと伝えられている。吉屋チルーの琉歌は、和歌的な掛歌、縁語、美意識をもったものが多く、抒情的な深まりがみられ、沖縄を代表する琉歌人である。「吉屋チルー」は近年の呼称で、古くは「よしや」と表記されている。 御茶屋御殿（うちゃやうどぅん）はかつて沖縄県那覇市首里崎山町にあった琉球王府の別邸で、国王が遊覧し冊封使などを歓待した場所であった。この「御茶屋御殿」を主題とした吉屋チルーのものとされる琉歌がある。当時の御茶屋御殿は非常に有名であり、庶民の憧れの場として捉えられていたことが窺える歌である。 （琉歌）拝（う）で拝（うが）んぶしゃ首里天加那志（しゅゆゐてぃんじゃなし）遊（あそん）で浮（う）ちゃがゆる御茶屋御殿（うちゃやうどぅん） （意味）拝顔すると去り難いのは首里の国王様であり、宴席で去り難いのでは御茶屋御殿である」 「御茶屋御殿」は 1677 年に作られ、茶道、生花、武芸などの様々な芸能が行われ、敷地内には望仙閣・能仁堂・茶亭が並び、周辺には築山や池、石造物が配されるなど、独特の意匠を凝らした庭園造りがなされており、敷地の北側（現在は城南小学校が所在する場所）には菜園が広がり、そこでは様々な薬種の栽殖が行われていた。1683 年に来沖した冊封使汪楫により、首里城の東にある園庭という意味で「東苑」と名付けられた。同じく琉球王府の別邸で、歓待等で使用された識名園は「南苑」とされている。 御茶屋御殿の建造物は第二次世界大戦で全て破壊され、現在はカトリック首里教会および付属幼稚園、一部城南小学校が建ち、当時の面影を感じることはできない。私有地のため、教会入り口には「御茶屋御殿見学の際は教会事務所へ一声かけるように」との注意書きがある。 2000 年度から 2005 年度に、御茶屋御殿周辺の発掘調査を沖縄県立埋蔵文化財センターが実施し報告書を公開している。2000～2002 年度に、現首里カトリック教会スクールバス車庫隣の広場で、唯一当時の写真や平面図等の記録が残されている「茶亭」跡地の発掘をした。これより中国産・タイ産･本土産・沖縄産の陶磁器の他、陶質土器・瓦質土器・土

		器・瓦・円盤状製品・銭貨・金属製品・煙管・石製品・貝製品・自然遺物などの多様な遺物が得られた。（沖縄県埋蔵文化センター 2003『御茶屋御殿跡遺構確認調査報告書』） 2005 年には茶亭の南側と東側にかつて存在していた土留めの石積み遺構が確認された。（沖縄県埋蔵文化センター 2006『御茶屋御殿跡平成 15・16・17 年度遺構確認調査報告書』） また、第二次世界大戦によって破壊された「御茶屋御殿」の玄関前約 40m の岩陰にあった石獅子は 1979 年に戦前の写真をもとに修復され、1986 年、那覇市指定文化財（有形民俗文化財）「御茶屋御殿石獅子」として登録されている。 「御茶屋御殿石獅子」は、周煌（しゅうこう；中国四川省の人で、1756 年、尚穆王の冊封副使として正使全魁とともに来琉した。）の著した『琉球国志略』（1756 年）によると、 「山の岩に『霝』（れい）の字のような梵字を掘り込み、石獅子がその下の岩陰に座っている。下には小さな四角い池があり、石でつくられた龍の口から、水が激しく湧き出てくる。その池の中には金魚が飼われている。前にはたくさんの竹が、後ろには古い松が数十株もあって、それらに趣があって美しい」 と記され、石獅子と当時の御茶屋御殿の情景を伝えている。 石獅子は火難をもたらすと考えられた八重瀬町東風平町富盛の「八重瀬岳」に向けられており、18 世紀、文人として名高い程順則が御茶屋御殿を詠んだ漢詩「東苑八景」に、御殿を火災やその他の災厄から守るという獅子として称えられている。石獅子のあった岩陰ががけ崩れの恐れが生じたため、現在は、御茶屋御殿より 450m 先、徒歩 6 分程度の「雨乞御嶽」側に移している。現在、石獅子と「雨乞御嶽」周辺は首里が一望できる展望台を備えた「首里崎山公園」として整備されている。 2020 年 4 月 24 日、玉城デニー沖縄知事は「首里城復興基本方針」を発表した。「正殿などの早期復元と復元過程の公開」や「『新・首里（すい）杜（むい）構想』による歴史まちづくりの推進」など 9 項目を基本方針に据え、まちづくり整備や琉球文化の復興に取り組むとし、御茶屋御殿の整備を検討することが初めて明記された。
7	**形式**	静止画（jpg）
8	**氏名**	撮影者：******
9	**時代・年**	2021/12/26
１０	**地域・場所**	沖縄県那覇市首里崎山町
１１	**利用条件**	表示 4.0 国際（CC BY 4.0）
１２	**関連資料**	
１３	**権利者**	岐阜女子大学
１４	**協力者**	なし
１５	**登録日**	2021/12/26

１６	登録者	津波古吟枝
１７	ファクトデータ	circd0916-0040.jpg
１８	サムネイル	
１９	公開の可否	公開可
２０	＊特色	【琉歌の説明】 　沖縄本島を中心にして生まれた叙情歌。八・八・八・六音の三十音からなる定型の短歌が一般であるが、仲風(なかふう)とよばれる和歌風の音数（五・七）の混じったものや、八音を連ねて最後を六音で結ぶ長歌形式のものもある。音楽と舞踊と深く結び付いて発達し、古典民謡、現代民謡、古典音楽等、現代に受け継がれている。 　琉歌の成立は 15、6 世紀ごろにさかのぼることができ、その母胎はオモロ、ウムイ、クェーナなどという沖縄諸島に伝えられた叙事的な古謡に求められる。琉歌の主題は、恋歌、四季歌、祝歌、教訓歌、羈旅歌のほか、固有の民俗、信仰、生活などを背景にしたものもあり多彩である。 　文化庁では，消滅の危機にある言語・方言の実態や保存・継承の取組状況に関する調査研究をはじめ保存・継承に資する様々な取組を行っている。 　琉歌の作者は、王、首里(しゅり)の貴族・士族階級の人々から農村の女性や遊女に至るまで、階層・性別を問わず幅広く、現在も沖縄の人々にその音数律が親しまれている。 【沖縄方言が消滅危機言語】 　「消滅危機言語」とは、世界各地で話されている言語や方言のうち、使用者の減少などにより消滅の危機にあるものをいう。「危機言語」、「危機に瀕する言語」ともよばれる。 　国連教育科学文化機関（ユネスコ）は、『Atlas of the World's Languages in Danger』を発行しており、その 2009（平成 21）年発行第 3 版において、世界の約 6000 言語を調査した結果、そのうちの 2500 あまりの言語が消滅の危機にさらされている、と指摘した。ユネスコでは消滅の危機にある言語・方言の程度を、以下の 6 段階で示している。 **①安全**　すべての世代によってその言語が話されている状態。 **②脆弱**　ほとんどの子供たちが話しているが、特定の場所（家庭など）に限って使われている状態。 **③危険**　子供が家庭でもはや母語として習得しない状態。

		④重大な危機　祖父母以上の世代によって話されており、親世代では理解されるものの会話で使用されておらず、親子や子供同士でも話されていない状態。 **⑤極めて深刻**　祖父母の世代でさえ部分的に、また、まれにしか話されない状態。 **⑥消滅**　その言語を話す人がいない状態。 日本国内では、8 言語・方言が消滅の危機にあるとされており、国頭くにがみ語（国頭方言）、沖縄おきなわ語（沖縄方言）、宮古みやこ語（宮古方言）は「③危険」に、八重山やえやま語（八重山方言）、与那国よなぐに語（与那国方言）は「④重大な危機」とされている。
２１	**＊活用支援**	
２２	**＊利用分野**	教育、生涯学習、地域学習
２３	**＊改善結果**	
２４	**＊処理プロセス**	
２５	**機関外リンク情報**	
２６	**目標**	
２７	**紹介**	